

留学生の異文化適応

－「他者から見た母国・セルフイメージ」の自己認識に着目して－

洪 静華

日本にいる留学生数は増加しており、日本という異文化への適応が困難になる留学生が顕在化している。適応の過程で感じる困難の度合いを左右する要因として、出身地域、食事や風土、宗教などの目に見えやすいもの（社会的要因）と価値観の違いや人間関係の構築、自己イメージなどの目に見えにくいもの（個人的要因）があると考えられる。

そこで、本研究では留学生の異文化へ対する適応の度合いに差をもたらす要因は何かを明らかにする。そして個人的要因の中でも留学生が周囲の日本人や日本人学生から自分の出身国や自分がどのように思われているのかという「他者から見た母国・セルフイメージ」の自己認識（以下、「他者からのイメージ」）に焦点をあてたものとする。これはクレーリーの「鏡に映った自我」やミードの「社会的自我」の理論と関連がある。さらに①日本と母国の政治力、経済力、文化的影響力の優劣・差をどのようにとらえているのか、②日本人に自分がどう思われているのかの2点が特に関連していると見通した。

調査方法は半構造化インタビューを採用し、筑波大学の外国人留学生を主な対象とし、「他者からのイメージ」はどのようなものであると思うか、留学生自身が持つ母国・セルフイメージ（以下、「自己のイメージ」）はどのようなものであるか、等を尋ねた。

アジア地域4名、欧州地域5名、北南米地域2名、アフリカ地域1名、合計12名の留学生に行ったインタビュー結果から、当初見通しとしていた①・②が適応に関連すると考えていたが、{他者からのイメージ} - {自己のイメージ} = {ギャップ} がプラス方向かマイナス方向かによって適応の度合いに差が生じることが判明した。また研究の当初、母国イメージとセルフイメージで分けて考えていたが、インタビューでは両者が重なった形での回答が多かった。「他者からのイメージ」が良く、「自己のイメージ」が悪い留学生4名はギャップがプラス方向のものとなり、比較的適応しており日本人に同化したがる傾向があった。「他者からのイメージ」が悪い留学生4名は「自己のイメージ」とのギャップがプラスになることはなく、精神面での適応に困難を感じていた。

今回の調査によって、ギャップがプラス方向、つまり自分が思うよりもイメージが良いと感じた留学生は精神面において比較的適応していることが分かった。また「他者からのイメージ」が悪いゆえにギャップがマイナスか0の留学生は精神面の適応により困難を感じていた。なおギャップがマイナス傾向の留学生はアジア圏出身者が多く、出身地域が「他者からのイメージ」をネガティブなものにした面もある。以上から個人的要因である「他者からのイメージ」と「自己のイメージ」のギャップは社会的要因である出身地域が関連している可能性が示唆された。今後「他者からのイメージ」と「自己のイメージ」ギャップの有無あるいは良し悪しと異文化適応の関係が、より多くの出身地域のケースを調べた上で成立するかどうかを検証していく必要がある。（指導教員 後藤嘉宏）